

士別地方における家畜生産

—1990年度夏期現地研究会に参加して—

梅 津 一 孝

(帯広畜産大学)

1990年度の現地研究会は「士別地方における家畜生産」をテーマに8月30-31日にかけて上川の士別市で開催された。30日夕方、JR士別駅より約30分、宿泊先である士別市日向温泉に到着、総会ならびに懇親会を行った。本会は家畜の管理を共通のテーマとした専門を異にする人々の集まりで各分野の交流がなされる絶好の機会と必ず参加するという方もいた。今回の参加者は総勢31名で大学、農試の他に農機関係、乳業会社、生産者の参加があった。懇親会では自己紹介の後、翌日の見学先である東多寄酪農生産組合の5代目組合長である高橋文雄氏から酪農共同経営30年のあゆみについて説明があった。

翌日は、士別市経済部畜産課長の小林一男氏の案内で大和牧場（市営育成牧場）、早川牧場（大規模肉牛経営）、東多寄酪農生産組合（搾乳牛400頭規模共同経営）、士別市めん羊牧場を見学した後、旭川駅前で解散した。

以下、見学した順に従い牧場の概況を述べる。

1. 市営大和牧場（公共育成牧場）

宿舎を朝8時30分に出発し、大和牧場に向かった。車中、小林課長から士別の農業の概要について詳しい説明がなされた。表-1に士別市の飼育家畜頭数を表-2に農業粗収入と農業所得を示す。

表-1 士別市における飼育家畜頭羽数

単位：頭、羽 各年度2月1日現在

年 度	乳 用 牛	肉 用 牛	馬	豚	め ん 羊	にわとり
昭 53 年	2,642	501	149	2,614	5	41,539
54	2,684	888	172	3,801	...	48,611
55	3,039	718	182	2,822	6	46,163
56	3,010	722	165	2,490	...	58,070
57	3,053	1,081	171	2,908	...	56,287
58	3,517	1,225	134	3,165	69	47,377
59	3,757	2,071	146	2,282	...	33,323
60	3,806	2,428	187	...
61	3,677	2,114
62	3,582	2,638	94	2,319	348	71,595

資料：農業基本調査・農業センサス

表-2 士別市における農業粗収益および農業所得

単位：100万円

年次	農業粗生産額			農業所得率 %	農業生産所得
	総額	耕種	畜産		
昭 53 年	10,181	8,456	1,725	74.7	7,602
54	11,020	9,181	1,839	78.4	5,466
55	9,706	7,724	1,982	80.4	4,433
56	8,001	6,114	1,887	84.2	3,109
57	9,524	7,639	1,885	67.3	2,658
58	10,487	8,597	1,890	71.8	3,743
59	7,889	5,834	2,055	83.9	2,986
60	10,952	8,719	2,233	61.5	3,851
61	11,933	9,576	2,357	57.1	4,046
62	12,389	9,626	2,763	57.8	7,156

資料：農林省北海道統計情報事務所

本牧場は士別市の南東部に位置し、国営等により大和地区の552haを草地開発し、養畜農家の委託放牧及び採草利用を行っている公共牧場である。昭和52年から草地の造成が行われ、牧場の全面利用は昭和57年より開始された。入牧

頭数の推移を表-3に利用料金表を表-4に示す。入牧頭数の約30%が本市周辺の町村や石狩、空知地方などの地区外の利用となっており、利用料金に格差がつけられている。

表-3 大和牧場における年度別入牧頭数（全面利用開始以降）

単位：頭

区分 年度	乳 牛				馬	肉 牛	合 計	備 考
	育成牛	授精牛	妊娠牛	計				
5 7 年	203	460	194	857	95	184	1,136	
5 8 年	248	540	304	1,092	99	126	1,317	
5 9 年	237	675	298	1,210	75	180	1,465	
6 0 年	148	771	343	1,262	85	58	1,405	
6 1 年	325	629	221	1,175	75	14	1,264	
6 2 年	214	739	302	1,255	67	12	1,334	
6 3 年	208	535	219	962	65	18	1,045	
平 1 年	166	538	218	922	33	57	1,012	
2 年	130	652	218	1,000	30	53	1,083	

※ 平成2年度は6月13日現在、今後の入牧頭数は約50頭の見込み。

表-4 大和牧場における放牧利用料金

単位：円

区 分	種 別		金 額	
			市 内	市 外
放 牧 料	乳 牛	1日1頭につき	180	200
	肉 牛	生後6カ月未満1日1頭につき	70	80
		生後6カ月以上1日1頭につき	150	180
	馬	当才馬1日1頭につき	70	80
		2才馬1日1頭につき	200	250
捕 獲 料	授精対象畜放牧期間中1頭につき		3,000	3,000

備考 上記使用料は、当該畜の入牧日における月令を基準とし、入牧期間中において同一料金とする。

草地は地形、牧道を考慮し44牧区に区分され、土壌診断結果にもとずいて施肥管理がなされている。以前は人糞を発酵させた液肥を散布し、好成績を得、昭和59年度に350tスラリータンク2基を新設し、液肥の散布を行ったが、未発酵のものが散布された場合もあって、入牧畜の嗜好性が落ちるなどの問題が発生し、散布を検討中とのことであった。乳牛は100-150頭を1群として管理されておりレジャー用の4WDのバギー車を使って牛追いを行っているとのことであった。

2. 早川牧場（肉用牛肥育素牛出荷）

小林課長から経営主である早川登氏の紹介があり、本人から牧場の概略説明を受けた。本牧

場は以前は水田農家であったが昭和59年の国の酪農肉用牛生産近代化計画にそって素牛の出荷を開始し、昭和60年度は約500頭、その後出荷を年々増やし平成元年度は約2000頭を出荷し、昭和62年からは肥育も開始し、年間約200頭を出荷しているとのことである。現在の飼養頭数はホルスタイン雄600頭、褐毛和種15頭とのことである。表-5にいただいた資料から飼養動態を示す。春に下痢による事故があるとのことであった。作目は水田転作としてアスパラ2ha、デントコーン5.1ha、牧草を約40ha耕作している。水田からの転作として畜産を取り入れた成功例であると考えられる。写真-1は農家の手造り牛舎である。簡易な構造であるが十分に機能しており、低コスト化の好例であると思う。

表-5 早川牧場の飼養動態

(頭)

	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
素牛導入	94	100	100	118	82	111	84	124	101	65	85	59	1,123
出荷	36	53	46	95	79	50	91	78	64	89	135	152	968
事故	8	10	15	15	13	9	9	8	7	0	0	0	94
期首 423												期末 484	



写真-1 早川牧場の手づくり牛舎

3. 東多寄酪農生産組合（農事組合法人）

宿舎に戻り昼食をすませ、大規模酪農共同経営の東多寄酪農生産組合を訪れた。本生産組合は昭和37年道営開拓パイロット事業として入植が開始され当時新しい農業生活形態の一つとして、各地で数多く生まれた共同経営のモデルケースとしてスタートした。未利用地開拓地として放置された重粘土地の原野 200haの払い下げを受け、牧草 180haの造成、成牛 170頭、育成牛 100頭の牛舎及び農機具等が昭和40年度までに整備された。しかし、当初は経験不足、技術不足から乳牛の管理、大型機械の効率的運用が出来ず、加えて重粘土質の耕地は表土も浅く、透水性が悪く粗飼料の生産が伸びず累積赤字も

増加したため、冬期間は牛舎管理に必要な最小限の人員を残し、男性は炭鉱や造林に、女性は静岡県のみかん山に出稼ぎに行くという苦勞をされたそうである。その後少しずつ共同経営の利点が活かされるようになり、堆肥の有効利用による土地改良や計画的草地更新などの技術力の向上により生産量も増加した。昭和43年に農事組合法人としての登記を完了し、昭和47年度には黒字経営に転じ、累積赤字も解消され、自己資本が蓄積されるようになり、昭和52年度には朝日農業賞を受賞されました。昭和56年度から4ヶ年計画で経営規模拡大の事業が総事業費17億円余で行われ、搾乳牛 400頭収容のフリーストール牛舎、170頭収容の育成牛舎、130頭収容のは育・分娩牛舎、大型スチールサイロ6基、コンクリートサイロ4基、付帯施設としてヘリンボンパーラー10頭複列が2基、バルククーラー4000lが2基、また、自動給飼、個体管理のためのコンピューターが導入され、これら、経営近代化の努力が認められ、昭和59年度は北海道農業電化協議会会長賞、昭和62年度には日本農業賞、また、平成元年には農林水産省農蚕園芸局長賞を受賞されました。図-1に生産乳量、乳代及び1頭当たりの乳量の推移、

図-2に家畜飼養頭数の推移を示す。最終的には成牛400頭、育成牛、肉用牛等合わせて1000頭の飼育規模の酪肉経営を目標としているとのことである。高橋氏は「共同の和」を力説され、人の和を保つために設立当初から共同浴場を設置し、仕事を終わってから共に風呂に入り1日の出来事を話し合う裸の付き合いを大切にしているとのこと、現在新しい共同浴場が建設中でした。

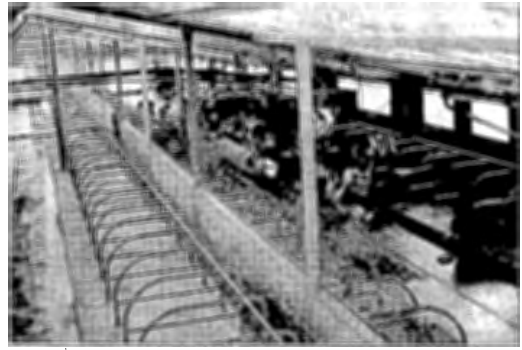


写真-3 東多寄酪農生産組合の400頭収容
フリーストール牛舎

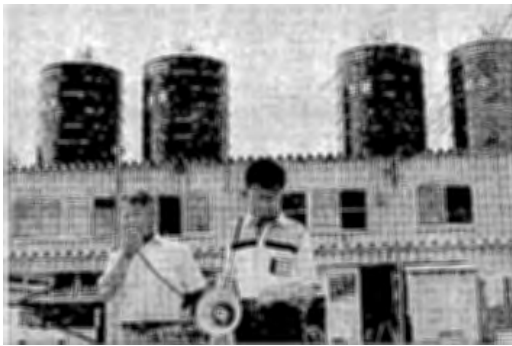


写真-2 東多寄酪農生産組合 (左 高橋文雄氏)



写真-4 新築中の共同浴場

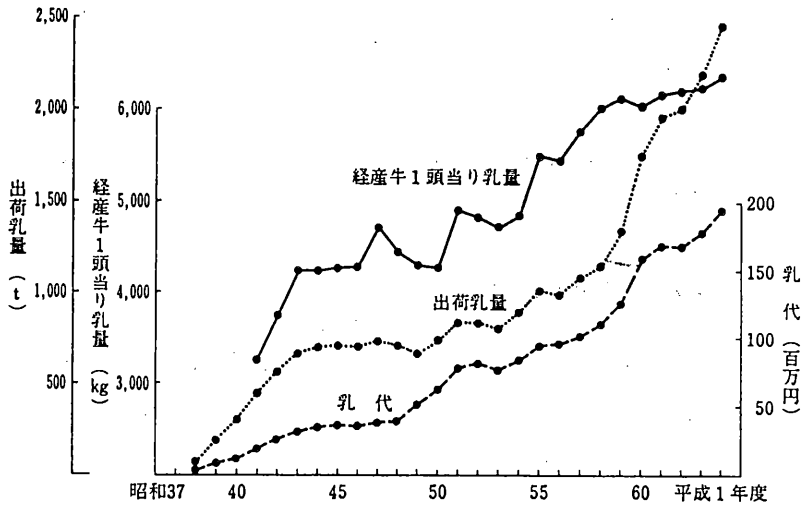


図-1 東多寄生産組合における生産授量、乳代及び1頭当り乳量の推移

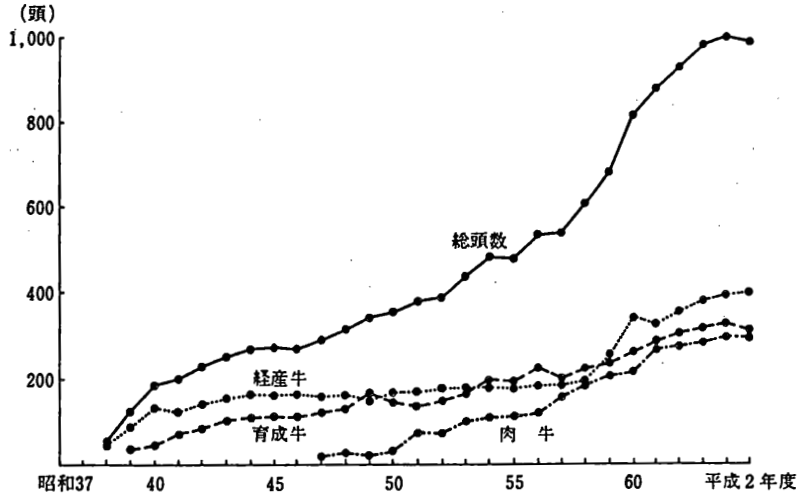


図-2 東多寄生産組合における家畜飼養頭数の推移

4. 士別市めん羊牧場

当市のキャッチフレーズは「サホークランド士別」というように観光の顔としてサホーク種の飼育を行っている。士別めん羊牧場の開設は昭和42年で昭和59年度の畜産基地建設事業により拡充、整備され、現在の施設が完成した。本牧場は士別市の一村一品としてサホークめん羊生産振興の基地、更に市民の憩いの場、英国めん羊12品種の飼養など観光牧場としての役割を果たしている。我々が訪れた時も本州からのライダー達や多くの観光客が訪れていた。表-6に飼養状況を示す。近年は季節外繁殖にも力を入れているとのことである。



写真-5 士別市めん羊牧場の前庭

表-6 士別市めん羊牧場の飼養状況

繁殖雌			繁殖雄	計	肉用	合計	備考
当才	2才	繁殖用	種雄		当才		
124	41	137	14	316	105	421	平成元年4月



写真-6 イギリスから導入した牧羊犬（ボ
ーダコリー）

以上、訪問した4牧場の概要について述べた。水田農家からの転作として肉牛肥育素牛出荷を始められ早川牧場、共同経営で幾多の困難を乗り越え大型酪農経営を成功された東多寄酪農生産組合などこれからの北海道の畜産の方向を示す好例と考えます。最後に今回の見学会のお世話をいただいた関係者の方々に感謝します。